

14・J1・A

国 語

注 意 事 項

1. 「開始」の合図^{あいず}があるまで、問題を開いてはいけません。
2. 問題文は3枚、解答用紙は4枚あります。
3. テストの内容に関する質問は一切できません。
4. 気分が悪くなったとき、筆記用具を床に落としたときなどは、手を挙げて監督者^{あかんとくしゃ}に合図^{あいず}してください。
5. 「終了」の合図^{あいず}があったら、すぐに筆記用具を置いて、監督者^{あかんとくしゃ}の指示に従ってください。

受験番号

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

*大阪から来た、転校生の大窪博士（ハカセ君）は小学校五年の二学期、クラスの変わり者である中田利也（サンペイ君）と釣りを通して親しくなる。しかし、それがきっかけでこれまで親しかったクラスの仲間との関係が一変する。

サンペイ君はもう帰ってしまったので、博士はサンペイ君の家に向かった。

離れの部屋にはサンペイ君はいなかった。たぶん川に行ったのだと思って博士はいつものポイントに向かった。はたして、サンペイ君は一人で釣り糸を垂れていた。

「やあ、ハカセ君」サンペイ君は後ろ向きのまま言った。

「福ちゃんと仲直りした方がいいと思うよ」博士はいきなり核心に切り込んだ。

「やつはぼくが気に入らないのだよ。瓢箪池のヌシのことだって、やつは信じようとしなからね。こっちはおじさんが釣りにかけて、糸を切られるのをこの目で見ているのだ。ヌシはぜったいにいるのだ」

「ぼくはクラスみんなにサンペイ君のこと、もっと知ってほしいんだよ。こんなにすごいし、おもしろいの、みんな全然知らないんだ」

「そんなことはいいのだよ、ハカセ君。ぼくたちは遠くにいくのだから、小さな教室にかかわることはないのだ」

「でも、みんなと仲良くやれた方が、楽しいじゃないか。サンペイ君はおかしい。なんか逃げてるみたいだ」

言ってしまった後で、博士ははつとして口に手を当てた。

サンペイ君の肩が震えていた。水面の浮きにアタリが来ているのに、竿を動かそうともしない。

博士は話しかけられずに、じっと背中を見ていた。

しばらくしてサンペイ君が大きく息を吸い込んだ。

背中を向けたまま、「ハカセ君、帰ってくれたまえよ」と威圧的に言った。

博士はそのままとぼとぼと家路についた。

博士は一人きりだった。

相変わらずクラスの人などは話せなかったし、サンペイ君も博士と視線が合うのを避けていた。だから、学校では一人きり。以前にもまして、たくさんの本を読み、いろいろ考えたり、煮詰まったり。

ぼくがいるべき場所はここじゃない。そんな感覚がよみがえってきて、お腹の中をぐるぐると巡っていた。

それでも、なんとか耐えられた。一人でいることに耐えることって、ひよつとするとサンペイ君が博士に教えてくれたちょっとした技術かもしれない。博士は家の近くの川で釣りをすることを覚え、自宅の水槽でタナゴも飼い始めた。友達がいなくても、本と釣り竿があればそれなりに満ち足りていられたのだ。

釣りつていい。辛いことを忘れられる。

どうして釣りを始めたのか聞かれたら、たぶん博士はそう答えただろう。

冬だから寒くて、博士は鼻水をたつぷり垂らしながらも、川に出るのはやめなかった。

博士はこんな日が、ずっと続くのを覚悟^アしていた。中学ではさすがにそんなことないだろうけど、小学校の間はこのままなのだ。覚悟すれば、しつかりとした気分²でいられた。

でも、変化というのはいつも突然だ。二月十四日、バレンタインデーの朝、いつものように登校して教科書を机にうつそう¹とすると、中から a 小さな包みが二つ、三つ落ちた。

最初はなんのことか分からなかったけれど、すぐに²りかいして博士は顔がかーっと熱くなった。きつと耳たぶの先まで赤かったに違いない。

チョコレートなのだ。博士は自慢じゃないけれど、これまでもらったことがなかった。それが今年に限って、いくつももらえるなんて。机の中に手を入れてさぐってみると、最初に落ちたやつだけではなく十個以上はありそうだった。

紙の感触が指先にあって、博士はそれを引っ張り出した。封筒だった。

（大窪君と中田君はともが³んばっていると思います。そんけいします。女子のみんなからチョコレートをおくり

ます」

視線を上げると、小林委員長がこつちを見て、リスみたいな大きな前歯を出して笑っていた。

そういうことだったのか。女子全員が博士のことを励ましてくれたのだった。

「今年は福ちゃんにはなしだつて。去年は十個以上もらつただろ。ショック大きいぜ」

斜め後ろの男子が耳打ちしてきた。えっ？ と耳をうたがった。博士にわざわざ話しかけてきたのだ。福ちゃんを見ると確かにうなだれた感じだつたけど、それ以上に博士は話しかけられた、という事実に戸惑った。

「あたしたちは仲間はずれをつくるような男子にはチヨコあげないからね！」小林委員長が大声で言うのと、b 笑いが起きた。

^⑤ クラスを成り立たせている力学がコトリと小さな音を立てて組み替わる。その日から、誰も博士に話しかけるのをためらわなかったし、福ちゃんもあやまりこそしなかったけれど、また以前のように博士を扱うようになった。すべては元通りだった。博士が、サンペイ君と親しくなる前とまったく同じ。サンペイ君は、誰とも話をせず、授業中もただずつと窓の外を見ていた。博士はそのごわごわした後頭部を時々見ては、^⑥ 胸がチクリと痛んだ。

三月になったばかりの昼休み、博士は例によつて一人で本を読んでいた。

昼休みが半分過ぎたことをつけるチャイムが鳴った時、廊下をあわただしく走る足音が聞こえてきた。

「ハカセ君、急いで来てくれないか」

息を弾ませた声に振り向くと、サンペイ君が教室の入口のところに立っていた。

突然のことで驚いたのが一番だつたけれど、同時にすぐうれしくて、博士は「いいよ」と立ち上がった。

「とにかく急いで来るのだ。ハカセ君は是非見に来るべきなのだ」

ちよつと高飛車で、なのに憎めない、言葉を交わさなくなる前とまったく同じサンペイ君だった。

後をついていく時、サンペイ君の服にあちこち泥がついていることに気づいた。

サンペイ君は校舎を出て、まっすぐに瓢箪池に向かった。池のほとりには釣り竿が投げ出されていて、大きなタモ網が水の中に半分浸してあつた。泥にまみれた取っ手をc 掴み、持ち上げると、水が飛び散るのも構わずに大きく振って博士の前に差し出した。

博士の目は網の中に吸い寄せられた。黒っぽい銀色の魚が、木漏れ日を反射しながら力強く身をくねらせていた。

「ヌシなのだ。水がぬるんで、やつと釣れたのだ」

いつものように淡々と言おうとしているけど、^⑧ どことなく声がうわずっていた。

「すごい……」博士はひとこと言つて黙り込んだ。

本当にすごいと思った。サンペイ君はずつと「ヌシ」のことを話していたけれど、ここまで大きく立派なものだなんて想像していなかった。

ゲンゴロウブナ。たしか、そうだ。顔の後ろから背びれにかけてこんもりと盛り上がったくましい形をしていて、なによりも大きかった。たぶん、五十センチ近くはあるんじゃないだろうか。サンペイ君や博士の体の幅よりもずつと大きい。

^⑨ サンペイ君は嘘をつかない。博士はなんだかじんとしてしまつて、その場に立ちつくした。遠くで午後の授業が始まる五分前のチャイムが鳴っていたけれど、そのチャイムの意味さえ気がつかなかったほどだ。

「さあ、ハカセ君、そろそろいくのだ」

サンペイ君はタモ網を水に戻して、服に付いた乾いた泥を払った。

「ねえ、サンペイ君、この魚どうするの」博士は熱のこもった口調で言った。

「そうだな。放課後まではこうしておくとして、とりあえず飼ってみるかもしれないな。でも、飼いきれないなら魚拓を取るのだ。こいつは魚拓を取るのに値するのだよ。おじさんが帰ってきたら見せなければならぬのだ」

「みんなには見せないの」

「なぜ、そんなひつようがあるのだい。ぼくはヌシを釣っただけで満足なのだ」

博士は小さくため息をついた。^⑩ サンペイ君はいつもそうだ。

近くに銀色のバケツが転がっていた。博士はそれで池から水をくみ取り、タモ網を上げて中にそいつを落とした。

バケツはいかにも小さかったけれど、体を少し丸めるようにしてなんとか収まった。

「なにをするのだね、ハカセ君」

サンペイ君が少し慌てた口調で言った。

「いいから、いいから」

博士はバケツを持って走り始めた。水がちゃぷちゃぷ撥ねて指に触れ、冷たいのになぜか気持ちよかった。

サンペイ君はほら吹きじゃない。本当にすごいんだ。

心の中でつぶやきながら、d 走った。こぼれた水は指だけじゃなく、シャツやズボンまで濡らしたけれど、それも気にならなかった。

教室の扉をガタンと開けたのは、午後の授業が始まった瞬間だった。

「大窪、どうした。遅刻だぞ。それにどうした、中田まで——」

柿崎先生の声を見無視して、博士は大声を出した。

「ヌシやでー、ヌシが釣れたでー、サンペイ君が釣ったんやで」

みんながぼかんと口を開けてこつちを見ている。自分が関西弁で話しているのに気づいたけれど、それはどうでもよかった。

「ほら、みんな、見いや。でかいでえ。ほんま、でかいでえ」

「ハカセ君、やめるのだ。ぼくはこんなのは好きじゃないのだ」

^⑪ そう言いながらも、サンペイ君は本気で止めようとはしなかった。どっちにしたって博士はサンペイ君の願いを聞き入れるつもりなんてなかった。

博士は教室を小走りに移動して教壇の前に立った。

「大窪、どういうつもりだ」

先生の言葉をまたも無視し、博士はバケツの口を傾けてみんなの方に向けた。それだけでは見えないと思い、バケツを床に置いて中からゲンゴロウブナを掴みあげた。手で持つというより、体で抱え込んだ。

どよめきが、漏れた。

「すげえじゃん」と誰かが言い、次々に賞賛^⑫の声が上がった。魚が嫌いな女子がいて、「いやだー、やめてよ」と大声で抗議した。

でも、博士は無視した。

まっすぐ歩き、福ちゃんの前に立った。

目が合うと、福ちゃんはその場で腰を浮かせて半分だけ立ち上がった。

「な、サンペイ君はほら吹きとちゃうで」

返事はなく、ただ福ちゃんはヌシを見つめていた。

ふいにヌシが腕の中であばれ、のけぞった博士の腕から躍り出た。福ちゃんが慌てて両腕をさしのべたけれど、それとは反対の方向にジャンプし宙を舞った。

振り向くと、サンペイ君の腕の中で、はげしく身をよじっていた。サンペイ君はいつのまにか博士の背後に立って、ヌシをキャッチしたのだった。

博士ははつと息をのんだ。^⑬ サンペイ君は口を一字に結んで福ちゃんを見ている。

そして、やおら教室全体を見渡し、無言のまま魚体を高々と、まるでバスプロの大会で優勝したトロフィのように掲げた。

誰も言葉を発しなかった。先生さえ、息を詰めて見つめていた。クラスの真ん中にただヌシとサンペイ君と福ちゃんがいて、コトリとも音はせず、しんしんと時間が過ぎた。

またも元気に体をくねらせたヌシから、飛沫^{しぶき}が散った。

^⑭ 窓からの光が反射して、教室全体が一瞬、おひさまの金色にほろりと輝いた。

受験番号
氏 名

一、 1～10のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。(送りがなも書くこと)

5	4	3	2	1
つげる	あやまる	うたがう	りかい	うつす
10	9	8	7	6
はげしい	あばれる	ひつよう	構わず	交わす

二、 ア～ウの意味を書きなさい。

ウ	イ	ア
ほら吹き	賞賛	覚悟

三、 a・bのことばを使って短文を作りなさい。

b	a
いかにも	ためらう

四、次の問いに答えなさい。

問 1 ―― ① 「博士ははつとして口に手を当てた」とありますが、どうしてですか。

問 2 ―― ② 「辛いこと」とありますが、「辛いこと」を具体的に表している一文を抜き出し、最初と最後の五字を抜き出しなさい。(句読点を含む)

問 3

a

d

 の空欄にふさわしい語を次より選んで、記号で答えなさい。

- ア ぐんぐん イ むんずと ウ ごそりと エ どつと

a		b		c		d	
---	--	---	--	---	--	---	--

問 4 ―― ③ 「がんばっていると思います」とありますが、何を「がんばっている」のですか。

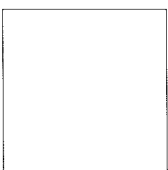
問 5 ―― ④ 「それ以上に博士は話しかけられた、という事実には戸惑った」とありますが、
(1) 「それ」の指す内容を答えなさい。

(2) 「戸惑った」のはなぜですか。

問6 ―― ⑤「クラスを成り立たせている力学がコトリと小さな音を立てて組み替わる」とありますが、クラスがどのように変化したのですか、説明しなさい。

問7 ―― ⑥「胸がチクリと痛んだ」とありますが、なぜですか。次の中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 博士は、自分がクラスの人々とサンペイ君が仲直りをすることを望んでいないことに気づいたから。
イ 博士は、自分がクラスの人々と仲直りしたことで結果的にサンペイ君を裏切ってしまったから。
ウ 博士は、自分がクラスの人々と仲直りすることよりサンペイ君とだけ付き合いたいと考えているから。
エ 博士は、自分がクラスの人々と仲直りしただけでサンペイ君との関係が変わっていないから。



問8 ―― ⑦「同時にすごくうれしくて」とありますが、どうして「うれし」かったのですか。

問9 ―― ⑧「どこことなく声がうわずっていた」とありますが、この時のサンペイ君の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

問10 ― ⑨ 「サンペイ君は嘘をつかない。博士はなんだかじーんとしてしまつて、その場に立ちつくした」とありますが、博士のどのような気持ちわかりますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア サンペイ君のこれまでの嘘がすべて帳消しになるのでは？とした気持ち。
イ サンペイ君の話を自分までがうたがっていたことを反省する気持ち。
ウ サンペイ君がみんなの誤解を自分の力で晴らしたことをうれしく思う気持ち。
エ サンペイ君が今まで嘘をついてきたことを許してもいいと思う気持ち。

問11 — ⑩ 「サンペイ君はいつもそうだ」とありますが、「サンペイ君」のどういうところに対して「いつもそうだ」と思うのですか。

問12 — ⑪ 「そう言いながらも、サンペイ君は本気で止めようとはしなかった」とありますが、なぜだと考えられますか。

問13 ————— ⑫ 「息をのんだ」は慣用句ですが、次の慣用句にふさわしい意味をア～オより選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|--------|---|--------------|
| 1 | さじを投げる | ア | すべてなかったことにする |
| 2 | 根も葉もない | イ | 物事を軽く見る |
| 3 | 水に流す | ウ | あきらめて見放す |
| 4 | たかをくくる | エ | まったく根拠がない |
| | | オ | ひどいしうちをうける |

4	3	2	1
---	---	---	---

問14 — ⑬「教室全体が一瞬、おひさまの金色にほーつと輝いた」という表現から、教室のふんいきがどのようになつたことがわかりますか。